エッセイ

古事記と「ほうれんそう」

西沢　昭

題目を見ると、これは何じゃ？と疑問に思われる方が普通かと思います。「ほうれんそう」とは報告、連絡、相談のことで、組織活動をする上では必須のことがらです。

学校を卒業して、会社に入った人たちは会社の先輩からまずこの「ほうれんそう」を学びます。職場の上司やリーダーから仕事の指示を受けたら、仕事の進み具合や、分からないことなどは、その都度リーダーに報告することで、グループ（組織）としてまとまった仕事が進行していくわけです。

この「ほうれんそう」には、毎日の朝礼での今日の作業報告や、毎日提出する業務日誌などがあります。例えば、業務日誌にはリーダーから指示を受けた内容と、それに対するその日の進度や問題などを書き込みます。毎日リーダーに提出し、リーダーのチェックを受けることとなります。このようにして、上下関係から成る組織はスムーズに運営されていきます。

つい最近、組織運営の中で「ほうれんそう」を行わなかったために話題になった人がいます。相撲界での暴力事件の処理についてです。内容は、事件があったことを速やかに組織のリーダーに報告しなかったことで、厳しい処分を受けた理事さんがいました。この事件の内容についてのテレビ報道では、「ほうれんそう」という組織運営の基礎ともいえる手順を軽視しているコメンテーターが多いことに驚きました。組織活動では上層部の人ほどこの「ほうれんそう」は重要で、これを軽視することは、組織上の大問題となることが多いと思います。

さてこの「ほうれんそう」はいつから存在したのでしょうか。驚くなかれ、組織運営としての「ほうれんそう」は7世紀ごろに作られた「古事記」の中に存在します。歴史学に詳しい方は常識かもしれませんが、わたしはこれを知った時びっくりしました。「古事記」の中に登場する神様は「ほうれんそう」を軽視したことで、殺されてしまったり、国をとられてしまったりしたと書かれています。この「ほうれんそう」の視点から「古事記」の該当箇所を読んでみましょう。

「古事記」上つ巻、「天照大御神と大国主神」の項の「天菩比神（あめのほひのかみ）と天若日子（あめわかひこ）」のところにその記述があります。天の組織のリーダーである天照大御神は地上を治めるために天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）を地上に派遣します。リーダーの指示に基づき、地上に到着した天忍穂耳命は地上がことのほか乱れていることを知り、まず天に向かって「・・・天照大神に請したまひき。」と、状況をリーダーに報告しています。「ほうれんそう」の実行です。適切な状況判断ができ天の国では次の対策を打つことができました。指示された事項に対して異変があったことは速やかにリーダーに報告しています。しかしこの結果派遣した天菩比神は地上に着いたことを報告したとは書かれていません。「ほうれんそう」の実行をしたかどうかは不明です。きっとうまくいっていたので、古事記には記載されなかったのかもしれません。そして、その報告は三年後になされます。三年後の報告した時の理由が現代的です。地上にいた大国主神に気兼ねして三年たってもリーダーに報告をしないということだったのです。本文では「大国主神に媚び付き、三年に至るまで復奏さず。」となっています。赴任から三年間「ほうれんそう」の不実施をしていたことが書かれています。天忍穂耳命が行った赴任直後の「ほうれんそう」は天菩比神においては明らかに実行されませんでした。しかもその理由が、赴任した職場で、そこに古株がいて、それに気兼ねをしないといけなかったというと、まさに現在の職場風土と同じことが起きていたようです。リーダーである天照大神は「ほうれんそう」が実行されなくても辛抱強く待っていたようです。これも問題です。

「古事記」によると、天照大御神は仕方なく次の人材を地上に投入しました。天若日子です。彼に対して地上に赴任するように命じます。天若日子は天菩比神と同様に、地上に着いてからリーダーへの報告がありません。その後は、この職場の乗っ取りを謀ります。すると、やがてそのことがリーダーにばれて、「ほうれんそう」

の不実行について咎めを受けます。古事記には「汝を葦原中国に使わせる所以は、其の国の荒振る神等を言趣け和せとぞ。何ぞ八年に至るまで、復奏さぬ。」と書かれています。その後、天若日子は悪いことをたくらんでいたことがばれて殺されてしまいます。現代的に言えば退職ということなのでしょう。

この古事記に書かれていることはまさに現代の仕事のしかたと同じであることが分かります。遠い7世紀から「ほうれんそう」の大切さや「ほうれんそう」をしないときには、できないわけがあり、それを早期に察知しないと、組織として大きな過ちを犯すこととなることを示しています。またリーダーからの指示を実行できない理由として、派遣先の職場に古くから根付く慣習に思いをいたらせることにより、「ほうれんそう」ができなくなり、古くからある職場の風土に染まっていってしまう様が描かれていることが分かります。昨年の流行語となった「忖度」に通じる現象のようです。

このように古代に書かれた「古事記」の時代から、出世を望む人間社会でのしがらみが存在したことが分かり、古典に対して親近感を覚えてしまいます。（以上）

エッセイ

武士道を考える

瀬谷　俊二郎

ここでいう武士道とは、「日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・道徳規範の根本をなす思想」と定義しておく。

広義には日本における支配階級であった武士の常識的な考え方を指すが厳密な定義があるわけではない。

ではなぜ今『武士道』なのか

武士道は封建社会の枠の中ではあるが、社会の支配階級であった武士がどのように生きるべきかを問うた修養の規範であり、物事すべてを功利的・自己中心的に推し進めようとする資本主義的思潮全盛の中でもう一度見直してみたいと思ったからである。

武士道の萌芽は、「武道」、「家訓」、「戦陣訓」等に求められるが、これらは主に武士としての生き方に関わるものであり、普遍的に語られる道徳体系としてのいわゆる「武士道」とは趣が異なる。

江戸時代になると儒教朱子学の道徳でこの価値観を説明しようとする山鹿素行の『孫子諺義（職分論）』等によって、新たに士道の概念が確立された。

その後、「武士道と云うは、死ぬ事と見つけたり」の一節で有名な『葉隠れ』が山本常朝によって著されたがこれは藩政批判なども あったせいか禁書となり広く読まれることはなかった。

幕末になると、山岡鉄舟が『武士道』を著し「神道にあらず儒道にあらず仏道にあらず、神儒仏三道融和の道念にして、中古以降専ら武門においてその著しきを見る。これを名付け武士道と言う」として、武士道という言葉がひろく使われるようになった。

明治維新後、市民平等布告により、社会制度的な家制度が解体され、武士は事実上滅び、替わって怒涛のごとく西洋の新しい価値観が導入され社会全体が急速に西洋化していった。

その変わりゆく姿を見て心ある人々が「日本人とは何か」を問い直し、改めて和魂としての武士道が見直されることになった。和魂洋才という言葉が使われるようになったのもこの頃と言われている。

１８９９年（明治三十三年）武士道を初めて体系的かつ総括的に述べた『武士道・日本の魂』が新渡戸稲造によって英文で書き上げられ同年アメリカで、翌年日本で出版された。

著者の新渡戸稲造（1862～1933）は札幌農学校2期生（1期生を教えたクラーク博士とは入れ違い）卒業後「太平洋の架け橋」になりたいとアメリカのジョンズ・ホプキンズ大学に留学し、その後札幌農学校助教授としてドイツのハレ大学にも留学し、ここで農業経済学の博士号を取得した人物である。

アメリカでメアリー・エルキントンと結婚後１８９１年に帰国、札幌農学校教授に赴任したが夫婦そろって体調を崩したためカリフォルニア州で転地療養をすることにして、ここで『武士道・日本の魂』を英文で書き上げたのである。